

個人レポート

松崎鶴雄 新資料翻刻

佐藤春佳

はじめに

する。

松崎鶴雄は明治から昭和にかけて活躍した中国文学者である。二〇二〇年夏、彼の書いた漢詩が新たに見つかった（画像資料参照）。

本資料は、福田安典氏がJSPS科研費JP18H00979の助成を受けた研究の菱田家資料整理の際に発見されたものである。筆者は日本女子大学で資料整理のアルバイトとして手伝いをし、資料を調べる機会をいただけた。

本稿は、発見された新資料の画像と翻刻を載せ、また作者である松崎鶴雄について紹介することを目的としている。

一 新資料について

ではまず、新資料の翻刻と本文の画像を載せる。

この資料は紙に直筆で漢詩が書かれたものである。おわりには「鶴雄」の文字が記されており、これが松崎鶴雄の手によって書かれたものだとわかる。

書かれている内容は哲学的なもので解釈が難解であるため、本稿では詳細な解説を書くことは省略し、いくつかの語句に注釈をいれるのみと

【翻刻】

一顛一起跋

崔嵬⁽¹⁾六十餘年

頭幾回飢腹

難成菩薩願

那邊梵唄⁽²⁾如⁽³⁾

來來 丙子歲晚戲唱⁽⁴⁾

古佛賢兄一餐 鶴雄

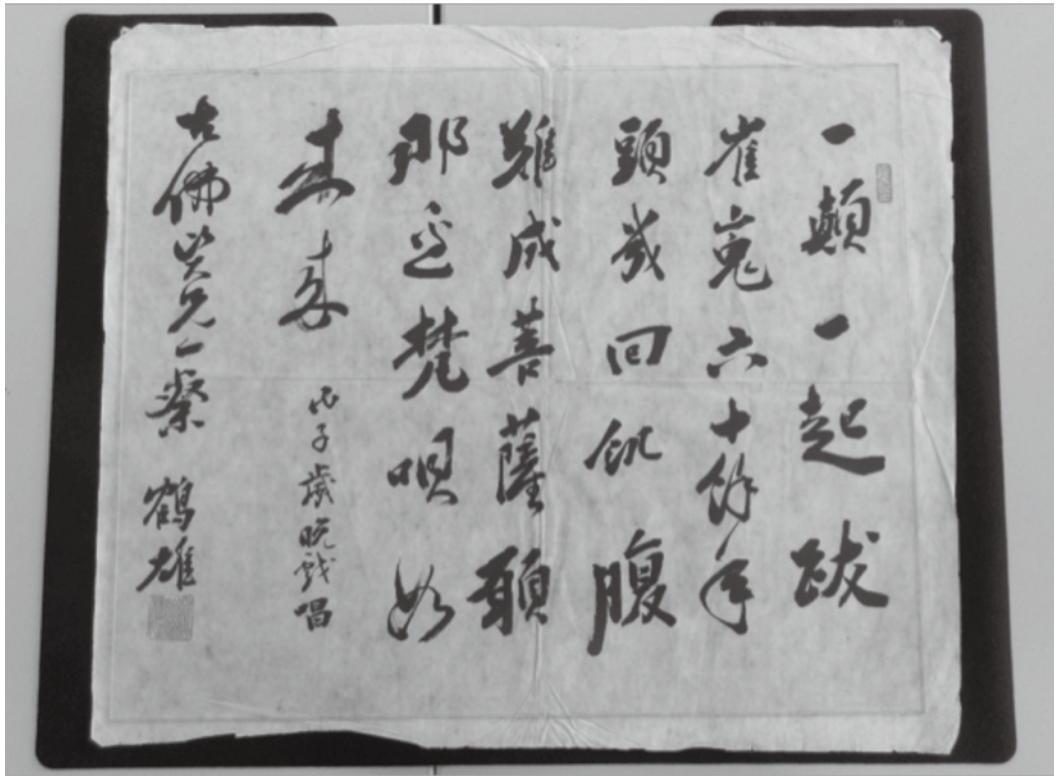
【語釈】

(1) 崔嵬 山の険しき、または高いものがそびえ立っているさま。

(2) 那邊 「あそこ」「どこ」などの代名詞。

(3) 梵唄 仏の功德を称えるために唱えるもの。

(4) 丙子 「ひのえね」のことで、一九三六年を示している。



二 松崎鶴雄について

冒頭でも触れたように、松崎鶴雄は明治から昭和にかけて活躍した文学者である。

今回は新資料が発見されたということで、その著者である松崎鶴雄について、彼の活躍や著書について紹介していく。

1、当時の評価

現代ではあまり名が知られていない松崎鶴雄であるが、当時の日本においては評価が高かったようである。

柴田清継氏による「漢学者松崎鶴雄 その民国文人との文化交流——大連在住期を中心に¹⁾」には、次のように書かれている。

「松崎鶴雄」と言っても、本誌を手に取りられた方には恐らくほとんど馴染みのない名前だろうが、実はかの与謝野晶子をして「松崎先生と相知る喜び」を得たと言わしめ、横光利一をしてその文章に対して「非常な名文」と唸らせ、さらにその随筆集『雨の思ひ出』（座右宝刊行会、一九四六年）を志賀直哉が「好個の名随筆として薦め」たという人物なのである。（中略）この松崎鶴雄（一八六七〜一九四九）、その文章の見事さもさることながら、本業は満鉄大連図書館の職員であり、その業務の傍らと言うべきか、あるいはこれこそ本業と言うべきか、漢籍を研究し、折に触れて漢詩も詠む漢学者であった。

このように松崎鶴雄は著名な作家陣と交流があり、また当時は著名な文学者だったという。

2、中国での活躍

松崎鶴雄は中国で非常に活躍した人物である。松崎は一九一〇年に四十二歳で初めて中国に渡り、中国人の学者に師事して数年間に渡って学問を身につけた。その後は妻の病気のために一度日本へと帰国するが、しばらくして今度は満鉄大連図書館へ司書として赴任することになる。

満鉄大連図書館においての松崎の活躍は、菊地隆雄氏の『満洲』の文芸を支えた人々——松崎鶴雄・杉村勇造と水野梅暁——にて次のように語られている。

松崎の主な仕事は、長沙で身につけた中国学、目録学を用いて主に漢籍を整理することであった。満鉄大連図書館の蔵書は満鉄の事業の拡大につれて年々増えていたが、漢籍については大谷光瑞寄贈の貴重書が入り、その整理が必要だったのである。松崎は十二年ほどのこの図書館に勤める。この間満鉄大連図書館は、単なる豊富な蔵書を有する図書館としてだけでなく、中国の東北地区における文化の発信地のような役割も果たすことになる。それには松崎の力が大いに与っている。日中の学者と分け隔てなく付き合い、貴重書の紹介と閲覧の便を取り、中国書の出版界に高くアンテナを張ってすばやく中国古典の研究書を紹介している。

大連で活躍した松崎は、中国においても学者として名の知られた存在となった。その後は図書館を辞し、しばらくしてから北京に移住する。そして戦後に日本へと帰国し、東京で一九四九年に八十二歳で逝去した。

3、著書

松崎の著書について、井村哲郎氏の「松崎鶴雄覚書」³⁾にて簡潔に紹介されているため、その部分を見てみたい。

松崎鶴雄の著書には、『羅振玉述 清朝學術源流概略』、『詩經國風篇研究』、『食貨志彙編』、『柔父隨筆』、『支那の文房來寶に就て』、『雨の思ひ出』、『漢詩集』、『猷粥餘音』、『呉月楚風 中国の回想』がある。これらのうち戦前戦中の刊行は前4書である。

このように松崎は多くの著書を残している。

『柔父隨筆』の「柔父」とは松崎の字であり、中国での修業時代に師から付けてもらったものである。

この本について加藤新吉の跋文⁴⁾によると、次のような記述がある。

曾て先生が満鐵に招かれて大連に住まれた頃、先生の學徳を慕ふ者、志を支那に有する者などが集つて先生を中心とする會をつくつてゐた。名づけて柔父會といつた。(中略) 先度の還曆には同人の手に成るさ、やかな文集を出した。(中略) 古稀の祝賀方法は舊同人の意思を忖度して小生が勝手にきめた。それが本書の刊行となつたのである。

つまり『柔父隨筆』は松崎を慕う人々により、彼の古稀の記念として刊行されたものであることがわかる。

『柔父隨筆』は「雨の思ひ出」をはじめとして松崎の隨筆がいくつも収録されたもので、松崎の中国での経験を知ることができる貴重な書籍である。

おわりに

松崎鶴雄については現代では知られていない部分が多々ある。当時の評価やその活躍ぶりなどは、再評価されるべきものであろう。中国・日本において活躍した松崎がなぜ現代ではあまり注目されていないのか、興味深い点である。

今回は資料整理によって松崎鶴雄の新たな資料を発見することができた。しかし新資料については翻刻までで解釈には至らなかったため、この点は今後の課題としたい。

注(引用文献)

- (1) 柴田清継「漢学者松崎鶴雄その民国文人との文化交流——大連在住期を中心に」(『日本語日本文学論叢』第六号、二〇一一年三月)
- (2) 菊地隆雄「満洲」の文芸を支えた人々——松崎鶴雄・杉村勇造と水野梅曉——」(『国文鶴見』第四十九号、二〇一五年三月)
- (3) 井村哲郎「松崎鶴雄覚書」(『News Letter』第二十五号、二〇一三年十二月)
- (4) 松崎鶴雄『柔父随筆』(座右寶刊行會、一九四三年)

参考文献

- ・『日本国語大辞典 第二版』(小学館、二〇〇二年)
- ・柴田清継「松崎鶴雄著作・作品目録」(『News Letter』第二十五号、二〇一三年十二月)